

## 衡陽は泥にまみれて

湖南省、衡陽（ヘンヤン）五月一日、午後三時。廻雁賓館。

その名前も初めて耳にする衡陽という街にやって来たのは、何かのあてがあつてのことではない。

もともと旅のスケジュールはごくおおざっぱに決めてあるだけなので、前日に次の日の計画をたてるというほどのものなのだ。例えば紹興も岳陽も長沙も、最初の予定には入っていないかつた。何かのきっかけや思いつきに従って寄り道をしたというだけのことだ。かといって、それが寄り道というならば本筋というものがあるのかと言われれば、それもほとんどないと言う以外にはない。ただぐるっと中国をひとまわりしてみようというだけのことだ。それがどれほどの大きさの周になるか、それもまた気分と状況しだい。

長沙の芙蓉賓館で昨夜思いついた計画は、南岳登山だった。早朝にバスで長沙を出発し、南岳まで行つて、麓に荷物を預け、登山をし、夜は山荘に泊まるという計画。まさにガイドブックどおりの理想的な計画だ。南岳登山のあとは、一気に桂林まで行つてしまおう。

と、計画したのはよかつたのだが、今は何故か衡陽の廻雁賓館なのだ。まだ小雨が降り続けているらしい。この天候ではかえつてこのほうがよかつた、僕は思いなおす。大切なのは、振り返つて「ああすればよかつた」と悔やむことではなく、状況を分析し、計画を立て直すことなのだ。

\*

午前五時半。芙蓉賓館を出て、まだ薄暗い長沙のメインストリート、五一東路を火車站へと向かう。雨上がりの街路は濡れていて、人通りも少なく、静かだった。

長沙火車站に近づく、そろそろ動き始めようとしているターミナルのぎわめきが伝わってくる。何台かの路線バスがまだひっそりと停車している駅前ロータリー付近の大通りでは、フロントに行き先のプレート掲げた中、長距離バスが客待ちをし、満員になったバスから出発している。

僕は少し焦りながら、南岳行きのバスを捜して、駅前ロータリーを行ったり来たりしていた。（というのも、ガイドブックには南岳行きのバスは午前六時発だと書いてあったからなのだった。）行き先のプレートを見ながらバスを捜すのだが、南岳行きのバスは見つけることができない。

たまたま目の前に停車していたバスの車掌に

「南岳（ナンユエ）？」  
と尋ねた。

車掌は幾度か目的地を聞き直したあと、道路の向こうを指差しながら、何事かを告げるのだった。

車掌の教えた方向に歩いていくと、長距離バスターミナルらしい建物があり、その前には旅行客らしい人々が集まっていたのだが、建物の入口はまだ閉ざされていて、入ることはできない。

『六時発』ということが頭にこびり付いていたので、僕は焦って、バスターミナルの付近を南岳行きバスを捜して、ウロウロ、ウロウロするのが、見つかることはできないのだ。

そうこうする間にも時間は過ぎていき、六時も過ぎてしまつて、しばらくするとバスターミナルの售票処が開いた。南岳行きのバスには乗りそびれてしまったと思い込んでいたけれども、とにかく長距離バスの状況を調べて今後の方針を決めなければならぬので、售票処の中へ入っていった。

窓口は各方面別に分かれていて、各窓口の前にはすでに行列ができていた。各窓口の上には、行き先と発車時刻とを記したボードが掲げられている。ボードを見ながら南岳行きを捜したが、なかなか見つからない。何度も行ったり来たりして、ようやくボードの中に南岳の文字を見つけたが、便数は少なく、出発時間は午後のようなのだった。

仕方がないので、南岳直行をあきらめて、衡陽行きのバスに乗ることにした。南岳は衡陽への途中なので、うまくいけば途中下車して南岳で降りることもできるだろう。

行列にしばらく並んで、衡陽行きのチケット（八時発、空調車、二七元）を手に入れた。

售票処から候車室へと入っていくと、だだっ広い候車室には行き先別にプレートが掲げられていて、その前にはベンチが据えられている。発車時刻の近いベンチには人々がいっぱい並んでいたが、衡陽行きの発車まではまだ一時間半もあったので、二、三人が腰を下ろしているだけでひっそりしていた。

売店でパンとジュースを買って、ゆっくりとベンチに腰を下ろして、食べた。

ベンチに座って煙草を吸っていると、若い男が何かをジャケットの内側に隠すようにして、乗客たちに声をかけていくのが目についた。「何だろう」と見ていると、男はやがて僕の前に立ち、悪事を耳打ちするように何事かを告げながら、ジャケットの内側に隠し持ったモノをちらつと見せた。それは一見何の変哲もない雑誌だったけれども、男の様子から考え

て、たぶんポルノ雑誌なのだろうと思われた。中国語を読んでもよくは分からないので、

「不要（プーヤオ）」と答えた。

しばらくすると、ぼろぼろの台車に乗って、それを漕ぐようにして、足の不自由な物乞いがやって来た。片手に二、三枚の一角札や二角札を握りしめて、ベンチに座っている人の前で、何かか呟くように言葉を発しながら、小銭を握りしめた手を微かに上下に振りながら、小銭を乞っていく。バス待ちをする人々のある者は無視し、ある者は（五人に一人くらいか）一角や二角をめぐんでいた。ポケットから小銭を取り出して、あげた。

それはたぶん慈悲などではないと、僕は思う。ただボロをまとった物乞いを目前にして、当惑してしまっただけなのだ。ただ当惑を逃れようとして、僕は小銭をめぐんだということなのだ。

そのようにしてひとりの物乞いをやりすごして、ほっとしたのもつかの間。次から次へと、物乞いはやって来るのだった。

体を動かすのも大儀そうな年寄りや、ボロをまとって白眼を剥き出しにした盲の人、指先が癒着した人、手のない人、足のない人、四つか五つくらいの子供たち。あとからあとから物乞いはやって来て、候車室のベンチを行ったり来たりするのだった。

最初、数人くらいには小銭をあげただけけれども、きりがないので、あとは無視することにした。目を合わさないようにして、数秒間無視していると、落胆したような様子を微かに漂わせて、物乞いは次の人のところへと去っていく。

そのたびに胸のどこかが軋んだ。

社会主義の国に物乞いがいないなどという神話を僕は信じてなどないな いけれども、改めて目にするひとりひとりの物乞いたちの様子には心が痛んだ。老いた人、身障者、幼児、彼らは生きていけない切実さを抱え持 って、そこにいた。

四、五才くらいのボロをまとった女の子が、僕の前に座った。寺や廟で中国人たちが祈るように、通路に額をすりつけるようにして、僕に祈る。少し顔を上げると、媚びるような笑顔を送ったあと、再び通路に額をすりつける。大人の動作をまねたような、女の子のかわいらしいしぐさが、ひどくこたえた。しばらく無視していたけれども、幾度も幾度も女の子は同じ動作を繰り返すのだった。その媚びるようなしぐさがどのように受け止められるのかをあらかじめ知っているかのように。

午前八時に長沙の長途汽車站を出発したバスは、相変わらず小雨もよ

うの幹線を走っていく。小雨は時々上がって曇り、上がったかと思うと再び降りしきるのだった。途中いくつかの小都市を通り抜けたほかは、どこまでも農村地帯や山道ばかりだ。

所々で道路工事や事故（トラックの横転）などで車は渋滞し、小一時間ほど立ち往生した。車が渋滞して停車すると、待っていたように、竹籠を抱えた物売りたちが声を上げながらバスの脇を行ったり来たりする。チータン（ゆで卵）や手作りのお土産物など。おそらく付近の農家の人々が副業としてやっているのだろう。

やがてバスは一二時過ぎ頃に南岳を通過した。白い大きな山門がそびえていたのでそれと分かったのだが、バスは衡陽までノンストップなのでそのまま通り過ぎてしまった。車掌に声をかけて降ろしてもらったことも考えていたのだが、小雨は降り止みそうにもなく、登山をできる天候でもないので、そのまま衡陽まで行ってしまふことにした。

衡陽汽車站着は午後二時頃。

なにはともあれ、衡陽に到着したのはいいけれども、ここがどこなのか、僕は分からない。ガイドブックには衡陽の地図はなくて、何の予備知識もないまま、僕は汽車站に立ったのだった。

とにかくまずは地図を手に入れなければ始まらないのだけれども、大都市には必ずと言っていいほどいる地図売りの姿が見当らない。汽車站の付近を行ったり来たりして、売店を覗いたりするのだけれども、ここにも地図はなかった。ふと思いついて汽車站の候車室へと入っていった。その売店で尋ねて、ようやく衡陽の地図を手に入れた。もつともその地図は片面がバスの時刻表、もう片面が湖南省と衡陽地区のバス路線図で、衡陽の市街地図は申し訳程度に添えられているだけだったけれども。

候車室のベンチに腰を下ろして一心に地図を見つめた。しばらくしてようやく汽車西站と記された場所を発見。他にターミナルとしては湘江という川をへだてて火車東站と西站があるが、どうやら火車東站の方が中心駅らしい。ガイドブックには衡陽駅の付近に外国人用のホテルがあると紹介してあるが、おそらく火車東站のことだろう。今後のことは、ともかくホテルにチェックインしてから考えよう。

方針を決めて候車室を出てみると、通りの向う側にバス停が見え、ちょうどバスが停車していた。近づいてみるとそれは一路の路線バスで、一路は汽車西站と火車東站の往復。そのままバスに飛び乗った。

バスは衡陽の雨に濡れたメインストリートを抜けて、湘江大橋を渡り、二〇分ほどで終点、火車東站到着した。

いかにも地方都市という印象のひっそりとした駅前通りをしばらく歩

いて、廻雁賓館へ。

廻雁賓館は大きなホテルではないが、衡陽で唯一の外国人も泊まれるホテルだけあって、ロビーもござつぱりとして、フロントの職員もホテルマンの制服に身を包んでいた。

ここに泊まりたいのだということ告げると、若い女性の職員は笑顔でどのような部屋がいいかと尋ねた。

「便宜的房間（安い部屋）」と答えると、少し考えて、二人部屋なら四九元だと言う。

「中国語は話せますか」と尋ねて、話せないと答えると、部屋の状況を調べて、空室にまわしてくれた。

つまり二人の相部屋で四九元なのだけでも、中国語が話せないのに中国人と相部屋になったら困るだろうと、今のところ空室のツインルームにしてくれたのだ。

ホテルの職員がこのような親切な対応には出会ったことはなかったので、僕はとても感激してしまったのだ。

廻雁賓館の部屋でお茶を飲みながら、今後のことを考えた。

今晩はここに泊まって、明日は予定通り南岳の登山をしよう。明日の夜は南岳に泊まって、明後日には夜発の便で衡陽を出発し、桂林へ行こう。そのため今日はこれから火車站へ行つて明後日の列車のチケットを買って、それからさっきの汽車站へもう一度戻つて、南岳行きのバスのチケットを買おう。

※

小雨が降り続く駅前広場は水たまりが広がり、露店も駅舎も雨に濡れて、縮かんだ小ねずみのような印象だった。

広場を棟切った向こうには小さな旅社があり、その左手に平屋の候車室、広場の右手にはひっそりとした小件寄存処の窓口があった。

售票処は候車室の左手脇にあり、数カ所の窓口の前には数十人が行列をつくっていた。售票処の壁に掲げられた時刻表に列車番号を確認してから、行列に並んだ（一二三次、衡陽発二一・四五、桂林着六〇八）。二〇分ほど並んで、ようやく窓口にたどり着いて、人民幣を差し出しながら列車番号を告げると、職員は女性で穏やかに、ひと言ひと言さすように何かを答えるのだった。その意味はほとんど聞き取れなかったのだけれども、ただひと言、当天（タンテン）という言葉だけが耳に残った。おそらく当日券だけしか発行していないということだろう。

予約チケットを手に入れることはできなかったけれども、服務員の口調が人を蹴りとばすようなものではなかったのが救いだっただ。

列車のチケットを買うのはあとまわしにして、駅前通りへ出た。腹が減ってきたので、適当な食堂を見つけて入っていった。

食事時間ではないからか、食堂は閑散としていて、食券売場の女性は暇そうに雑誌を読んでいた。牛肉面(二元)を注文してテーブルで待っていると、ときおり客が来て肉まんなどを買っていく。その対応はまるでやる気がないような、時間が彼女のまわりでだけ遅く流れているかのようなのだった。

客が来ると、彼女は雑誌に落としていた視線をちよつと上げるのだが、興味なさそうに再び雑誌に目を落とす。しばらくして客が声を上げて注文すると、ゆつくりと視線を上げてしばらく客を眺めたあと、いやいやながらのようにゆつくりと立ち上がって、ふてくされたように肉まんをビニール袋につめる。代金を受け取ると、引き出しに投げ入れるようにして再び雑誌に目を落とす。まるで雑誌を読むことが本来の仕事であって、客は仕事のじゃまをする闖入者でもあるかのように。

中年の男の客が来て、肉まんを注文した。テーブルに運ばれてきた肉まんを見ながら、男は声を上げる。店員はつまらないことでもいうように、ふてくされたように言葉を投げる。男は逆上し、大声を上げた。言葉は分からないけれども、その身振りから察して、割箸を出せ、出さないで口げんかになったらしい。テーブルの上には箸立てに丸箸が立ててあるのだけれども、男は清潔な割箸を要求しているようだった。牛肉面を食べながら、しばらく口げんかを聞いていたが、やはり結局は客の方が立場が強いらしくて、店員は奥から割箸を出してきて、投げるように男の前に置いた。ふてくされたように、食券売場の彼女の席に戻って、何事もなかったように、再び雑誌に目を落とすのだった。

小雨は休みなく降り続いていった。舗装道路も黄色い泥にまみれていた。肩をすぼめるようにして、人々は泥道を歩いていった。駅前通りを離れて、湘江の方へと向かった。人通りのまばらなひっそりとした泥道。

やがて湘江沿いの湘江東路に出ると、掘建小屋のような售票処があった。渡し船の乗り場だ。二角の料金を払って、階段を降りていく。川岸から丸太を並べた橋を渡って、船着場の待合室へ。しばらくして小型の渡し船が到着し、渡し船は湘江の黄色い流れを横切って、五、六分で対岸に到着。

どうやらこちら側(湘江西岸)の方が衡陽の中心らしい。道路の両側に

並ぶ建物も大きいし、道路も広い。先鋒路から解放路とたどって、二〇分ほどで見覚えのある汽車站に着いた。

汽車站の售票処に入っていくと、すでに窓口は閉ざされていた。仕方がないので、チケットは明日バスに乗る前に買うことにして、售票処の壁に掲げられた時刻表と料金表を見て、南岳行きのバスの料金と発車時間を調べた。ところが料金表には南岳は記されているのだが、時刻表にはどう捜しても南岳行きというのがないのだった。

「ここからは南岳行きのバスは出ていないのか」と当惑していると、いつの何に近づいてきたのか、若い女性が声をかけてきた。

「××××？」

彼女の言葉は少しも聞き取れなかったので、

「我是日本人。听不懂（私は日本人です。聞き取れません）」

と答えると、しばらく思索してから、彼女は僕の持っていた地図にポールペンで筆談を治めた。

『你是哪里人（あなたはどこから来ましたか）』

『日本』

『到哪去（どこへ行きますか）』

『明天去南岳（明日、南岳へ行きます）』

『今天住在哪里（今日はどこに泊まりますか）』

『廻雁賓館』

『你的身份証、給我着好吗？（身分証を見せてくれますか）』

取り出したパスポートを彼女はしげしげと眺めた。

『今天晚上住我们这里好吗？（今晚私たちの所に泊まりませんか）』

彼女は宿の客引きなのだった。

『明天座車方便（明日のバスの手配もします）』

『你怎么一个人到这里来吗？（どうしてひとりでここへ来ましたか）』

『你老婆吗？（あなたの奥さんは）』

『后天回到我们旅社——迎興旅社（明後日果ってきたら、迎興旅社へ来てください）』

『明天去南岳旅遊（明日南岳觀光に行つて）』

『什么时候返回这里（何時にここへ帰りますか）』

『我们交个朋友好吗？（私たち友達になりましょう）』

『我叫鄧桂元、你嗎？（私は鄧桂元、あなたは？）』

『到南岳有很多車（南岳行きのバスはとても多いです）』

『明天在車上賣票（明日バスの中でチケットを買えます）』

『車上有到南岳的牌子（バスには南岳行きというプレートがついています）』

ひとしきり筆淡を交わし、明後日の夜は彼女の旅社（迎興旅社）に泊まることを約束したあと、数時間前、初めてこの衡陽の街に到着したときと同じように、一路のバスで火車站へと戻った。廻雁賓館への帰り道に、雁牌ビールと梨（小五個）と湖南煙草（計七元）を買った。

ホテルに戻って、お茶を飲もうと思ったが、ポットがないので、服務員の女性をつかまえて、

「請給我開水（お湯をください）」

と告げると、彼女はしばらくして、

「カイシュイ、カイシュイ」

と笑いながら、ポットを持ってきた。

ここではこのような言い方をしないのだろう、たぶん。日本人のへたな北京語の発音がキザに聞こえるのか、おのぼりさんのように聞こえるのか、それは分からないけれども。

テレビの放送（中央電視台）には漢字の字幕がついている。中国に入国以来、注意してはテレビを見ていなかったので、初めて気付いたことだけれども、おそらく発音がひどく異なる地方では字幕を付けているのだろう。

いつだったかバンコクのチャイナタウンで京劇を見たときも舞台そでに字幕が映写されていて、僕はつきり耳の悪い人のためのもなのかと思っただけけれども、京劇の発音が分からない人のためのもだった。そのことを思い出した。

中国（漢字の国）は広く、同じ漢字を使っている、その発音は地方によつては外国語ほども異なるのだ。教育の場やテレビなどには北京語が普及していて一応は用が足りるのだけれども、庶民の日常生活にはその地方の言葉が根強く生きている。

テレビでは死刑が是非かの討論の番組をやっている。言葉は聞き取れないし、字幕も速くてよくは分からないけれども、どうやら政府のまわ



し者みたいな男性が死刑の必要性を説き、もう一方の女性が反対の立場から食い下がっているみたいだ。男性は主として社会の安定と秩序を説き、女性が人の命や人権を説く。被害者や被害者の遺族の感情を主とした日本の死刑論議と通じるようですれ違うものを感じた。日本も中国も死刑の国なのだけれども、日本では死刑は闇から闇へと人知れず消されることなのに対して、この国では処刑、つまり見せしめなのだ。

しばらくの間討論が続いたあと、討論を聞いていた聴衆が死刑賛成、反対の投票をする。結果は六対四で死刑賛成の勝ち。

中央電視台のこの番組にどれだけ共産党、中央政府の意向が影響を与えているのか、僕には分からない。ただ死刑反対という論も堂々と展開されている番組が放送されていることにちよつとした驚きを感じたことは事実だ。